
 □書 評□

 花田 春兆著：
 いくつになったら歩けるの

熊本大学整形外科 渡辺 英夫

著者の花田春兆氏は大正14年生れの脳性麻痺である。しかも重症のアテトーゼ型で、歩行不能であるばかりでなく食事をとるのも不自由で、ADLにも他人の手を要するような状態である。しかし実はその道では有名な俳人であり、中村草田男主宰の「萬緑」の同人で俳人協会の全国大会賞を得たこともある人である。更に身体障害者の同人誌「しのめ」の編集や福祉関係の単行本も数冊出しておられる才能豊かな人でもある。

この「いくつになったら歩けるの」という本は全国障害者問題研究会の「みんなのねがい」誌に1年半にわたって連載されたものをまとめたものであるが、著者の幼少児期の記憶から今日までの生き方の信条、更に身体障害者問題などが得意の俳句を所々に挿入しながら随筆風に書かれている。

「いくつになったら歩けるの」と幼い日に問うて母親を困らせ、学校に入ってから友達に同じことを言われ、更にこの言葉を自分の子供から言われるようになった著者は、その生き方の信条を“身体的にばかりでなく経済的にみてもとても独立して歩いているとは言えないかも知れない。しかし私は私なりの方法で私だけしかできない歩き方をしていくつもりである”と文中でのべており、その気概は“雲雀冲天不具なるも俯向くこと欲せず”の句によく表現されている。

この著者にかくの如くやる気をおこさせたのは幼い頃

光明学校（東京の養護学校）の先生が繰返し言った「手や足が悪いというのは胃や腸が悪いのと同じにただの病気なんだ。別に変わった人間でも劣った人間でもないのだ。だから他人がどう言おうと気にしないで胸をはって堂々としていればいいのだ」という言葉や、診察したある脳神経科医が言った「運動を司る方の脳はほとんど完全にやられている状態ですね。一生なおることは望めないかも知れません。けれど知識の方の脳には被害が及んでいないようですね。正常と大鼓判を押してもいいです。その方の心配はまったくいりませんよ。それどころか優秀ですよ」という言葉であったようである。

しかし著者は重度身体障害者にしては恵まれた境遇にあり“6本足の春兆さん”とあだ名されたように、世話をしてくれる母親、付添いの人、健康な奥さんに恵まれ、更に光明学校ではよき先生に巡り合い著者の生きがいの1つである俳句を作ることを覚えている。

この本を通読してみて驚くことは身体障害者が一般人を非常にするどく観察しているということである。私など肢体不自由児施設や母子通園センターなどで脳性麻痺に接する機会が多く、身体障害者と知能については別個にそれぞれの能力について理解しているつもりであったが、この本を読んでもみるとドキリとさせられることがあり、今後身体障害者に対する接し方にも再考を要するようである。

結局この本は私にとってまことに印象深く、medical sideの人々にぜひ一読をすすめたい。また身体障害者の家族は勿論のこと、障害者自身もこの本を読めば益することが少なくないと思われる。

(四六判 268 頁 ￥ 800 ミネルヴァ書房刊)